

ふたり房次郎

〈金山芝居由来帖〉

金山篇

絵：野口宣友

経乗院村から金山村に入ると沢山の役者幟が川沿いに並び寄せ、お太鼓が軽快に賑やかに聞こえてきます。やがて、誰言うでもなく孝行息子房次郎のことが一座中村三升(さんしょう)座長の耳に入りました。話を聞いて胸うたれた座長は房次郎からは「木戸銭」を取らないように言いました。芝居を楽しむ母親の笑顔を見て房次郎は心底から歡びました。『芝居って工工なアア』房次郎はくいいるように役者の演技に見入りました。

昔、貧乏だが持ち前の明るさで母親を大事にする「房次郎」(ふさきち)と言う孝行息子が経乗院村(現在の福頼地区)にいました。母親は芝居見物が大好きでしたが、当時、大掛かりな「芝居興行」が許されていたのは安養寺領の「山市場」だけでした。母親を背負ってゆくにはあまりにも遠すぎます。そんな訳で、年に2回の金山村を訪れる一座を待つのが何よりの楽しみでした。しかし、その房次郎少年は銭が一丈も無く、母を背負いながら薪運びを行ってやっと「木戸銭」をつくりました。

さて、一方、ここ中村三升一座には二部村(溝口)出身の美男役者・女形の村歌雀がいました。たまたま中村一座の来演に感動した金山村の「田辺房好」は地元での演劇同好会と一緒に歌雀の指導を受けて公演したのが座長三升の目にとまり、感性豊かな演技力の彼を内弟子にして、芸名も「中村田雀」と名づけました。やがて、房好こと中村田雀は忠臣蔵を題材にした「大和櫻義士の面影・恋の絵図面とり」で美男義士岡野金右衛門を演じて大喝采を得るまでの人気役者へと成長してゆきます。後年、中村歌雀の後継者となり一座を継いでふるさと金山村で堂々

の凱旋公演を実現しました。地元集落の若者を指導し、「浪曲口演」により物語を進行していく異色の「金山芝居」を創始したのです。当時、芝居の前座として「俄(にわか)芝居も興行の人気見世物の一つで風刺と滑稽の即興的寸劇で最後には話を落とす「落ちにわか」と共に「金山芝居」は満天下に大衆演劇として大輪の花を咲かせ盛り上りました。往年、法勝寺「金納座」(常盤座の前身)でにぎにぎしく大熱演した「博多しぐれ涙の親子鳥」は感動の「母物」で多くの大衆芝居ファンの涙を誘い「金山芝居」の代表作となりました。その演技で母を訪ねる少女「おきみ」を演じる子役こそ、かつて孝行息子で苦勞して母親に芝居を見せたあの房次郎少年その人でした。母が大好きだった「桂房次郎」の二代目として、「房次郎」の名を受け継いだ房次郎はよき先輩に恵まれた華舞台で天国の母へ捧げる情熱の演技を心魂ふるわせて情感たつぷりに熱演するのです。その後、中村田雀こと田辺房好と房次郎の二人の「房」をとって金山の「ふたり房次郎」と異名もつ大衆演劇人気名優となりました。



隆盛極めた「金山芝居」も戦時中絶したが戦後復活して、昭和43年4月法勝寺「さくらまつり」芸能大会を最後の公演として幕を閉じました。だが、地区の情熱ある若者たちは先人のさきがけた伝統芸建て直しを志し、平成4年11月「ザ・ふれあい芸能1Nさいはく」で堂々の「旗揚げ公演」を実現し、その熱演は全国へ報道されました。その後数回の公演を最後に灯火は静かに消えていきます。あの伝統の「金山芝居」復活が待たれる南部町です。

完